年報
近代日本研究
19
1997

近代日本研究会

地域史の可能性

地域・日本・世界

山川出版社

黒川能
――農民芸能と祭りにおける中央―地方のダイナミックス――

ウィリアム・W・ケリー

「能は常に演技者と観客による創造であり、魂の祈りの行為であり、ドラマを現実に変容させるものである。それゆえ、演技者は常に一人の人物であり、その中心人物のまわりに能と呼ばれる宇宙が創造されるのである。演技者は事象の一部としてそこに存在するのではなく、演技者が変容の魔術を通して出現するところにドラマが成立するのである」（フランスの詩人・劇作家、ポール・クローデルの言葉、「演劇の諸観念」〈『日本の演劇』一九二六年〉）。

「ポール・クローデルの言葉を借りれば、『芝居というものは何かが起こるものであり、能は誰かが出現するものである』」（金春国雄、一九八三年八月）

「能を見に来るのか、呑みに来るのか」（黒川地方に伝わる冗談）

毎年二月の一日、二日になると、多くの人々が山形県庄内地方の黒川の集落と春日神社に集まる。このとき、年に一度の大祭が行われ、神道の儀式、若者の競技、大宴会、そして荘厳な能の演技が夜を徹して繰り広げられる。この祭礼には、その神事能の能座の人々や親戚のみならず、多くの観光客、日本全国や欧米からの研究者、はては国内や海外からの報道

陣までが集まる。

この黒川能の祭典は、現代日本における他の文化パフォーマンスと同様に、過去を持つということと永遠に過去であり続けることとの狭間に位置している。黒川の多くの人々は、この祭典の度ごとに、ジェンダー、世代、個人そして家の間で繰り返されてきた名誉と地位をめぐる抗争を思い出す。一方、この祭典を文化的観光事業として祭り上げてきた中央のマスメディアにとっては、それは有機的な連帯と権威あるものの見方を表示する永遠の過去である。

以下では、この抗争と賞賛の組み合わせが、二〇世紀の日本における国民意識と国家形成の核心的次元、つまり地方を中央社会に包摂し、同時に差異化しようとするダイナミックスと結びついていることを論じたい。

一　伝統の文化政治

一般に、近代国家の社会的・政治的地理には二種類のパターンがある。すなわち車輪のような形をなす単極型の国と、人口の集積体が点々と存在する多極型の国である。アメリカは、ワシントン、ニューヨーク、シカゴ、ロサンジェルスなどいくつかのセンターを持つ多極型の国であり、日本、フランス、イタリア、スペインなどは、唯一のセンターを持つ単極型の国である。後者には「上り・下り」の意識が強いが、多極型の国では「横並び」意識の方が強く現われている。つまりアメリカのような多極型国家では、権力闘争は主に地方と地方との間で生ずるが、日本のような単極の国では、一つの中央に政治権力、経済力、文化施設、名門校や人口が集中されているため、地方社会のあり方の決定に当たっては中央―地方関係のダイナミックスの方がはるかに重要な役割を演ずるのである。

この単極国家の中央と地方の関係の中に、包摂と排除または同一化と差異化をめぐって、必然的かつ持続的な緊張が存在すると解釈するのは、それほど難しいことではない。しかしながら、この見方は、祭りや地方について語る時、しばしばみられる傾向とは逆である。すなわち、そのような時、人はしばしば過去と現在を対極的に位置づけたり、歴史を二分して把握しようとする。歴史的変化の軸と地理的距離の軸とを駆使することによって、田舎が現代都市社会の「祖先」になってしまうようなマトリックスを作り上げる傾向があるのである。

近代を都会と等置し、前近代を地方と等置しようとするこの操作の背後には、おなじみの社会変化モデルがある。このモデルは、歴史的変化を未分化な共同性が現代社会の断片性に道を譲ると説明し、かつ多彩な複数の地方伝統が唯一のマス・カルチャーに同質化されてゆくとも説明する。社会的な断片化と文化的な同質化の間には明らかに不整合があるのだが、我々はそれをめったに認識したり、掘り下げて考えようとはしない。しかし、少なくとも、このような歴史的変化と権威ある伝統の永遠性とを安易に結びつけることだけは警戒するようになっている。

最近、この問題に関しては多くの刺激的な著作が出版された。「伝統の創造」(Hobsbawm and Ranger, 1983)、「過去の復活」(Zunz, 1985)、「伝統のマーケティング」(Dominguez, 1986)、「歴史の創造」(Johnson et al., 1982) などである。これらの多くは、いわゆる「伝統の文化政治」という新たな問題領域に着目したものであり、国家、エスニックグループ、階級、コミュニティ、その他の集合体がかつぎだす伝統主義の諸プロジェクトが、いかに中央に吸収されやすいか、あるいは中央に対抗的であるかという問題に、関心の多くを向けている。

一般にこれら最近の研究は、伝統の持つ関心剝奪の力 (diversionary potential 人の関心をあるものから別のものへ逸らすこと)、つまり地方の伝統が人々の注意を中央の政治・経済的な力と真面目に取り組むことから逸らすように機能することを強調してきた。たとえば、歴史家のデイヴィッド・ウィスナン (David Whisnant, 1983) によると、二〇世紀初頭のアメリカでは、中央からのプロテスタント伝道を通して貧しいアパラチア山脈の文化が「発見」され、民謡集団、織物のギルド、笛の音楽隊など、地域の伝統活動が全国に褒め称えられることになった。しかしそれと同時期に、この地方には資本家たちが鉱山開発のため侵入し、取り返しのつかない巨大な経済的変化を引き起こしていた。自律的な伝統が誇りとなったにもかかわらず、それは地方経済の再編成への抵抗にはまったく無力だったのである。この地方伝統主義は中央権力の浸透を偽装する役割を果たしたとすら言うことができる。

一方、これらの新しい研究の一部は、伝統の対抗的な可能性を強調する。つまり、伝統は中央に対する政治闘争に文化的手段を与えるケースもある。「従属させられたグループやコミュニティはどのようにして自分自身の歴史という感覚を発展させ、維持することができるのだろうか」と問いかけるのである。たとえば、ムスリムとジャワ人が支配するインドネシア国家において、バリの人たちは彼等自身のヒンドゥーの伝統と独自の気高い過去を強調した文化的観光事業を始め、

みごとな商業的成功を収めた（McKean, 1989）。

これら関心剝奪や対抗力をめぐる議論は、いずれも差異に関する構築（fabrication）と周縁化（marginalization）を強調する傾向がある。そこで扱われる伝統主義は、民族や地方を際立たせようとするのであるが、それは故意かつ意識的に「伝統的」であろうとしているように見える。さらに、これらの分析は、伝統の様々な表出を、日常生活と分離され、区画されたパフォーマンスの舞台に限定しようとする傾向も持つ。

これらの関心剝奪や対抗力をめざす闘争は、しばしば、構築された伝統、すなわち人為的に復元されたクラフト技術や浮かれ騒ぎのフェスティヴァルといったものに帰結しがちである。しかしながら、それは考えうる唯一の結果ではない。少なくとも黒川、差異化とアイデンティティ形成が同時に進行し、過去が現代に深く埋め込まれている黒川で生じていることについては、説明できないように思える。伝統の文化政治を再評価するには、まず黒川の文化プロダクションにおいて、伝統のダイナミックスが、戦後日本全体における政治経済やイデオロギーのダイナミックスと、いかに関連しているかという問題から始める必要がある。

二　戦後日本社会における包摂と排除

戦後日本の社会政治構造に関する社会科学の議論が、主にコンセンサスやコンフリクトのモデルをめぐって行われてきたのは残念なことである。そのため、戦後日本において制度とイデオロギーがいかに国民を包摂し、同時に社会的差異を生みだしてきたか、というより重要な捉え方、すなわちこの二面を同時に結び付けて把握することが、疎かにされてきた。たとえば、一九四〇年代後半から一九五〇年代にかけての政治・経済の再編成、そして一九六〇年代の高度経済成長は、地域、ジェンダー、階級による差異が現実に続いたにもかかわらず、それを黙して語らないことを必要とした。戦後日本型の経済は、サラリーマン、すなわちフルタイムで終身雇用かつ良く訓練された少数の男性労働者を核とし、女性のパート、再就職高齢者、出稼ぎ季節労働者や地方の下請け業者を周辺に置いた、不安定なシステムである。この特権集団と周縁集団の差異は、大企業や中央省庁の内部にとどまらず、それらと下請けのネットワークや下位行政機関との関係にまで

及んでいる。下請け会社のほとんどは中小企業で、日本の労働人口の約四分の三は従業員三〇〇人以下の会社で働いている。その多くは地方にあり、男性の出稼ぎ労働者やパートの女性や高齢者が従業員のかなりの割合を占めている。

この状況は、中央の大都市と地方が資源と人材の集中をめぐって繰り広げてきた、元来不平等な闘争をより熾烈なものにしている。それは政府官僚や雇用のヒエラルヒーのみならず、教育のヒエラルヒーでも展開してきた。学校教育のヒエラルヒーは次第により多くの人々を受け入れ、訓練するだけでなく、同時に絶対的な差別も生み出してきた。公教育は、学校予算の均等な配分、文部省によるカリキュラムの標準化、誰もが受験できる入学試験の制度など、メリトクラシーのメカニズムを通して、戦後日本の国民的規範となってきた。しかしながら、これらの制度はメリトクラシー的達成という理念の中でもかなり狭い概念と基準に基づいており、学歴ピラミッドの傾斜を強めるばかりであった。戦後の制度は、管理とメリトクラシー、標準化と差別化の両方を結びつけてきたのである。

この同一化と差異化のダイナミックスをめぐるイデオロギー表現のうち、最も強力で包括的な意味を持つものは、おそらく「中流意識」と「伝統」という一見矛盾するディスコースであろう。他の論文で述べたように（Kelly, 1986, 1990）、中流階級イデオロギーは過去四〇年間にわたって人々の生活様式を形成するうえで多大の影響力を持ってきた。政府の政策も、世論も、大企業での雇用、高学歴、そして男が外で働き女が家庭を守るという形の核家族を理想化してきたのである。このイデオロギーは、大半の日本人の生活の現実とは食い違っている。しかし、ガリ勉学生、仕事熱心なサラリーマン、情熱的な教育ママなどのステレオタイプを通じて、この新中流階級のイデオロギーは、達成の基準、望ましいもののイメージ、そして獲得しうるものの限界を効果的に定義してきたのである。

このイデオロギーと一見対立しているように見えるものがある。新たに復活し、変動し、また多面性も含む「伝統」というディスコースである。それはいくつかの流行の中に見ることができる。その一つは歴史ブームという現象であるが、それは、新しく生じてきた地方の歴史や民衆史への関心を伴いながら、大部分は、メディアによる日本の過去、とりわけ過去の英雄の賞賛によって引き起こされた。一九六〇年代の後半から今日まで、ＮＨＫで最も人気のある番組は日曜の夜の大河ドラマと朝の連続ドラマシリーズである。夜の大河ドラマは一年にわたって放送される歴史的人物の武勇談で、大半が徳川家康や豊臣秀吉のような大胆な男性を主人公にしている。一方、朝の連続ドラマは身近な過去を描いた半年にわ

たるシリーズであり、一般に女性が主人公で、大恐慌、戦争そして戦争直後の過酷な毎日をストイックに耐える姿を描き出してきた。当然のことながら、そこには、歴史的活動における男女差と社会変化における個人差というメッセージが込められ、世に送り出されたのである。

流行した「伝統」には、国民性の探究、つまり「日本人論」というブームもある。このブームは、日本のすべての側面における「ユニーク」さを語る膨大な著作群を生み出した。タテ社会の構造、依存と甘えの心理学、ニュアンスと沈黙のコミュニケーションを重んずる言語、忍従の気風、そして派閥のデモクラシー、等々である。日本人の味覚、頭脳、そして日本の蜂や猿でさえ、日本人以外の者には十分理解することができない独自性を持っていると主張されたのである。しかし、「伝統」のディスコースはこの二つだけではない。日本の民俗、田舎へのノスタルジー、そして「ふるさとブーム」がある。このブームは、地方の生活と人々を理想化し、その中に「われら失いし世界」(Laslett, 1965) を位置づけ、保存しようとした。『火まつり』や『楢山節考』といった映画を見る者は、そこに、日本の田舎イメージ、国民的ハートランドとして同質化され、パッケージされたそれを垣間見ることができる。

「伝統」に関する現代のディスコースは、英雄的個人とユニークな国民と危機にさらされた民衆という概念を編み込み、それによって戦後日本の本流をなす新中流階級の生活様式に対し、対抗的な観点、不可欠で郷愁的なそれを提供してきた。この逆向きのイデオロギー的潮流は、国家の設けた制度と同じく、民俗を保存し、伝統化しようとする一方で、実際の生活様式を混交させ、現代化しようとしてきた。それは田舎の住人を引き入れると同時に排除し続けるものでもあったため、彼等の中に深いアンビヴァレンスを残してきたのである。地方アイデンティティの自律性を維持するには、中央社会の異質な諸言語にどのように合わせたらよいのだろうか。中央への包摂にあたって有利な立場を築くには、その異質の諸言語をどのように操作できるのだろうか。

このように、ここで扱っている問題は、単に包摂を図る中央と自律を維持しようとする地方の間の抗争の問題でなく、また関心剝奪としての文化と対立的アイデンティティとしての文化の間の闘争の問題でもない。黒川のような地方にとって、これはより複雑なディレンマを意味している。なぜならそこでは、野心や生活様式の多くの点において都会からの旅行者とまったく見分けがつかない人々によって、地方の祭りが、それも日本で最もわかりにくい伝統的な演劇の上演を中

心とする祭りが行われているからである。この祭りは都会への誘引と都会からの分離という、もっとも基本的な緊張を表現している。それはすなわち、包摂と排除が様々の形をとって争われ、交渉に付されているアリーナなのである。

三　黒川能――農民の生活と芸術

山形県庄内の日本海沿いの平野は、長さ約八〇キロメートル、幅約一五キロメートルの広さで、二つの都市といくつかの小さな町、そして約七〇〇の小集落を有している。黒川はその南端にある町であり、徳川時代には一三の小集落がまとめられて一つの村をなしていた。黒川には平野を見下ろす丘の上に春日神社があり、この一三の集落は今でもその教区のメンバーとみなされている。黒川の一三集落にある三〇〇世帯のうち約二五〇は神社の氏子で、二つの能座に分かれている。

春日神社の祭礼のうち最も重要な行事は、旧暦の正月にあたる二月一、二日に行われる王祇祭である。これは神社の守護神とその教区の人々に呼びかけ、饗応し、祈願する祭りである。神は山から降りて人々と交わり、人々の生活と生計に幸運を投げかけるよう呼び寄せられる。王祇（扇）は頭に房のついた長い三本の棒に白い布を着せたものであり、三角形の扇の形に拡げられると、神を誘い寄せるヨリシロとなる。王祇祭は行列、饗宴、祈り、競技、そして能の形をとった神聖な演劇からなり、後片付けの儀式も含めると三日間にわたって催される。

能は日本の古典的舞台芸術と言われている。それは、民衆の娯楽と神聖な儀式の折衷から生まれ、六〇〇年ほど前に世阿弥によって磨かれ、系統化されたものである。演技者、すなわち舞い手、謡方、鼓方そして笛方は、詠唱や詩や音楽や舞踊を融合し、慈悲深い人物から悪魔的な人物まで、まためでたいものから悲劇的なものまで、いろいろな人物やテーマを簡素で様式化された形で演ずる。そのプログラムは、軽い滑稽な狂言と組み合わされている。

春日神社の二五〇世帯の氏子は二つのセクション、ほぼ同じ規模の上座（七集落一三〇世帯）と下座（六集落一二〇世帯）の二つの能座に分かれている。その中には神社の神主、各能座の禰宜、そして能の太夫といった世襲の地位がいくつかある。ほとんどの役は世襲でないが、中心的な役者と囃子方は決められた家系から出てきた。子供と若者は補助的な役を務めており、また謡い手は六〇、七〇代の老人で占められることが多い。この各能座から各々約七〇人が選ばれて二月

の祭りの舞台に上がるのである。

能は神社ばかりでなく、能座のメンバーの家においても披露される。その家（当屋）は毎年、年功序列によって選ばれ、まだこの生涯最後の名誉に浴したことのない最年長の男性の家で演じられるのである。これはかなりの負担を伴う名誉ある機会で、多くの物資や資金の準備と古い家屋のスタイル（大きな部屋、高い天井、取り外し可能な壁の仕切など）の維持を必要とする。それはより現代的なスタイルに建て替えたいという希望と相反するものであるが、この機会を断わる者はほとんどない。

初日の早朝、二つの能座の主要人物たちは、神社に集合し、山から降りてきた神に挨拶をし、祈りを捧げる。各能座は二つある王祇の一方を携えてそれぞれの当屋へ行進し、そこへ神を安置する。その日は一日中、能座のメンバー全員と招かれた親戚や客の間で会合や宴会が行われる。夕方になると、能の舞台が家の真ん中の部屋に設置され、七時までに全員が夜通しの上演を見るために集まる。出し物は、まず神への祈願、すなわち開いた王祇の前でひとりの五歳の男の子が謡いながら足を踏み鳴らす踊り（大地踏み）から始まる。続いて式三番、そして五つの能が四つの狂言をはさんで披露されるのである。

二日目の明け方、当家の人々、能役者、そして他のメンバーたちは、王祇を奉じて行進し、神社、より正確に言えば神社のふもとにある家に戻り、そこでもう一つの能座と会い、挨拶を交す。それから両者は神社の階段を並んで登るのであるが、そのとき能座の若者たちは我先に扇を神社の舞台に戻そうと競いあう。神社では合同の大地踏みが演じられ、その後、各々の能座はまた能を演じ、それに若者たちの競技、神社の宮司による祈禱が続く。祭りは午後遅く、急テンポの三番叟と王祇を神社の中に戻す競技で締めくくられる。その後、王祇はもはや神霊を吹き込まれることはなく、そこに一年間しまい込まれるのである。

この二日間は、多くの人々にとって、芸術的にも感情的にも満足のゆく、熱狂と荘厳、遊びと儀礼の律動する時間である。この祭りのテンポは、序破急という能の三つのテンポ、すなわち簡素でゆっくりとした導入、長めの披露、そしてすばやい締めくくりという展開を模したものと言って良いだろう。

王祇祭はより広く解釈すれば、一月三日から二月三日までの一か月間にわたって行われるものである。初めには神への

供儀、出し物の発表、そして場所と出演者のお浄めが行われた。それから一か月間、練習と準備そして物忌みが続く。二月三日にはお面、衣装そして舞台が片付けられ、他の資材も来年の当屋に運ばれる。今年の当屋は助けを借りた人々にお礼を述べ、来年の当屋は来年の援助を求める口上を述べる。

王祇祭は確かに儀礼上もっとも重要な演能の機会であるが、能座は他に年六回も上演の機会を持ち、また東京など他地域からの特別な上演要請に二、三回応えるのが普通である。事実、王祇祭とその演能は日本の地方における最も有名な民俗芸能の一つと目されるようになっており、しばしばテレビのドキュメンタリー、学者の論文、そして旅行者のガイドブックのテーマになってきた。それは、一九三〇年代に始まった本田安次の「民俗芸能」運動（民俗学の三分派の一つとなった）の中で重要な位置を与えられていた。黒川能の上演は、東京における民俗祭やプロの能劇場でも行われた。黒川能は一九七六年からは国の公式な「重要無形民俗文化財」となり、いくつかの重要な文化的表彰も受けた。つまり、黒川能は正統性を表す衣裳を完璧にまとっているのである。

黒川には外部から様々な人々が注目をしている。五流の職業的能役者、大学の研究者、メディア、素人の写真愛好家、お祭り愛好家、旅行者、そして好奇心にあふれた親戚たち、等々である。町の教育委員会の中に能保存委員会があり、ここが土地っ子のいわゆる「外交」のための緩衝や連絡の装置となってきた。最近には、当屋での演能を見にくる訪問者を規制するため、くじ制度の導入を決めた。また、農林水産省のプロジェクトの資金で、春日神社に隣接して伝習館が建設された。そこには練習用の舞台や展示場やレクチャー・ルームが設けられたが、さらに年間を通して訪問者を惹き付け、楽しませ、教育するために、駐車場やレストランを建設する計画もあった。この事業は、黒川の住人たちが、地方が国全体の文化環境の中でどんな位置を占めるべきか、そして田舎の生活に中央社会が侵入して来るのをどう考えるべきかという問題について激しい論議を始めた、その出発点であった。

四　時代に即した演劇と時代を超越した伝統

私は初め、黒川能の意義と構造を表舞台と裏舞台という演劇のメタファーを使って分析するつもりであった。一九八五

年、黒川の能座は東京の国立能劇場で三日間上演するように要請を受けたが、その関連で、お面や衣装や他の品物も特別に展示され、『黒川能の世界』というタイトルの美しいカタログが出版された。そのカタログは次のような序文で始まっていた。

黒川能は、山形県鶴岡の近くにある黒川という村の神社の神事能として確立された。……この能は江戸時代以前から今日まで継続して上演されてきた。五流の職業的能役者でなく、農民により伝承された稀有の例である。五流の芸術的な洗練と対照的に、黒川能は祭りや日々の生活と密接に結び付いて生き続けてきた。つまり、芸術的精神の核にある民衆の生活の息吹きを保存してきたのである。黒川能は五流のレパートリーから消えた多くの演劇技術と演目を保存しているという意味においても貴重である。最近、黒川能は学者によって注目され、何度も東京で上演されたため、その存在は広く一般に知られるところとなっている。

この序文は、いわゆる「生きた伝統」に防腐処理を施し、「ノスタルジックな真実」を守ろうとして書かれている。黒川能はまず伝統であり、共同性の表象であり、庶民の芸能である。さらにそれは神道の儀式でもある。

私にはしかし、それが、本音と建前のような関係にあるものに見える。表舞台では外部者による消費のために神聖な伝統を演じていながら、その裏では内部者がみな正反対の現実的な感情を共有しているように思えるのである。カタログの序文を見ると、黒川の人々がこの点をよく自覚していることがわかる。

「黒川能は不変ではない。常に変化の流れがある。能座には太夫を演じる家系は一つであるべきだという規範があるが、上座の太夫のポストは二〇世紀に入って四度も家系を変えてきた」

「黒川能には共同があるだけではない。健全な競争もある。祭りの儀礼の中ではそれがはっきりと表現され、他の場面では隠されていることもあるが、しかし結局対立は明らかとなる。大地踏みの役に自分の息子をつけようと裏工作が行われる時のように」

「黒川能は隔離されたり、外部に無関心だったわけでなく、中央社会とずっと関係を続けてきた。一七〇〇年代や一八〇〇年代において、黒川の人々は地元の大名の前で定期的に上演を続けてきたし、城下町においても民衆のための公演を定期的に行っている。二〇世紀に入ると、外部との接触はもっと広範になった。レパートリーは外部の師匠か

ら学んだものであり、衣装や面はパトロンから与えられたり、プロの職人から買って集められたものであった」

「それほど神聖なものだろうか？　祭りの時、お神酒で口滑らかとなって語られる話題は、神との饗宴というよりは、もっぱら仲間の役者との比較である。たとえば、今年の下座の謡いは小さすぎて聞こえなかったとか、Tさんは高砂の最後の部分を担当するのには力不足だったとか、あるいは、Cさんの生徒はUさんの生徒よりも大地踏みが上手だったといった具合である。祭りにおける話題は芸の話であり、のべつ家族や友人や競争相手の演技に関する評価が語られるのである」

黒川能の舞台でのイメージと舞台裏の現実との相違を目にして、私はまず伝統的芸術と現代農業のアイロニーについて論じてみた（Kelly, 1986）。すなわち、黒川の人々が、この祭りを戦略的に利用し、農業の機械化と町の施設の近代化に必要な補助金を獲得するため、定評ある伝統芸術を利用している様を描くことが最も重要に思えたのである。この祭りの政治に関する解釈は、今でも意味がなくはないだろう。しかし、私は次第にこの見方は単純すぎると思うようになってきた。

その理由の一つは、祭りと農業の関係が、戦後、より複雑かつ曖昧になり、直接的でなくなってきたことである。すなわち、農業の復興に力が注がれた敗戦直後、あるいは一九四〇年代後半から一九五〇年代にかけては、住民たちはその時間と資源を他の活動につぎこみ、祭りはほとんどつぶれかかった。一九六〇年代から一九七〇年代の初め、農業の景気が豊かな補助金と機械化のおかげで良かった時、祭りは無関心と冬季の出稼ぎのため再び危うくなった。逆に、一九八〇年代に米の過剰生産と農業の多様化の失敗により農業の危機が深まると、祭りはブームとなったのである。実際、収入のほとんどを工場とオフィスの仕事に依存し、専業農家はほんの一握りしかいなくなるにつれて、祭りの組織はより活動的となった。祭りは農作業の組織と行事を反映すると言われるが、今ではほんの形式的にしか関連を持たなくなったのである。文化の政治がどんなものであれ、それは単に功利的なものではない。またそれは地方の演技者と新たな国民的観衆とをはっきりと区別するものでもない。私が以前に立てた内部者と外部者という図式は、ここに第二の難点を持っている。その考察は自ずから、私を冒頭の議論に立ち戻らせることとなる。

五　包摂／排除と正統性

普通の場合、伝統主義の持つ関心剝奪や対抗の力は、中央が地方の政治・経済を巻き込み従属させようとする包摂の圧力、および地方が正統な形式と過去の記憶を保存し守ろうとする差別の力として表現できるかもしれない。しかしながら、このような図式は黒川にはあてはまらないように思われる。ここでは、中央による包摂は祭りの過程にも内在しており、正統性は黒川の人々ばかりでなく外部の人々の関与も必要としている。その意味で中央－地方関係は一層複雑になっているのである。

祭りの準備と実施の過程には、地元の人々相互における様々な抗争が内在している。能座の長老・神社の委員会・村の行政組織の間、役者を出す家々の間、男性の役者と女性の裏方の間、父と息子の間、師匠と弟子の間、また農家の社会的アイデンティティを大切にする人とサラリーマンの仕事を大事にする人の間、これらの間で絶えず抗争が展開されている。このような抗争においては、一般に、儀礼の象徴や組織、そして実施過程での効果は、しばしば有力者の側を支え、強化する結果となる。黒川能もその例外ではない。

しかしながら、祭礼において型や意味そして価値が支配することは、エリートによる支配を許すと同時に、エリートに規律を課すことにもなる。スコット（Scott, 1986）が巧みに述べたように、従順（compliance）は弱者の効果的武器になりうるのである。この意味において、王祇祭の催しは地方の空間に、慣習のイディオムに導かれた抗争の道を開いている。たとえば、現在、上下両座の太夫はいずれも、そのメンバーから能座の期待に背いたと批判されている。一人の太夫は、人柄が良く（それは真のアマチュア精神を反映していると考えられていた）大変好かれていたのだが、それにもかかわらず、世襲の後継者たるべき四〇歳の息子が太夫になるのを拒み、さらに黒川の地を離れるのを止められなかったとして、厳しく批判されている。もう一つの能座の太夫は、その舞台芸術の見事さや五流の役者と個人的に親しくしているという点で賞賛されているが、他方ではその独裁的なリーダーシップを強く非難されている。彼は古い共同経営のパターンを主だった役者と教師による三人組で覆えしたとして、多くの非難を浴びたのである。いずれの場合も、辞職と引退の脅

威にさらされていた。これらの問題は、芸術面におけるハイアラーキカルな慣習と、祭りへの貢献における平等主義との間に、矛盾が絶えず存在し続けている事実を前面に押し出したのである。

包摂をめぐる闘争は、別の形で表現することもできる。祭りの「精神」あるいは「心」には、共同と競争の両方の概念が含まれているが、いずれもとかく悪用されがちで、それゆえに抑制される必要がある。たとえば、共同は、幾人かの能座メンバーが、春日神社の経営委員会が非公開で行われていることについて述べたように、陰の談合として見られがちである。同様に、能舞台における競演の背後には、主要な役者たちにおける熾烈なライバルと敵対の関係が存在している。

正統性の問題は、儀礼の性質の変化や、儀礼のパフォーマンスの評価基準について古くから取り上げられてきた問題を投げかける。この点については様々の説明が行われてきたが、日本の儀礼について最も頻繁に引用されるのは、民俗学者柳田国男の言葉、世俗化され、聖なるものを失った現代世界における儀礼の運命に関する嘆きである。柳田は排他的で内向きの信仰集団が次第に外部の観客によって取り囲まれ、取って替わられると主張した。柳田の霊的エントロピーのモデルの中で、共同体の秘儀は観光用の見世物に変わってゆくのである。

外部の人間が黒川の老人たちに現在の演技と遠い過去の祭りを比較するよう求めるとき、しばしば柳田のノスタルジーはある程度の支持を得る。これは一つには柳田ブームが彼の思想を普及させ、過去に関する質問への安全で易しい答えを提供したためであろう。にもかかわらず、さらに質問を深めると、現代の祭りの中から「精神」が消えたというその含意に同意する住民は少ない。

柳田モデルの代わりには、アパデュライ（Appadurai, 1986）がもともと違ったコンテキストの中で提案したモデルが借用できるかもしれない。彼は元来の排他性、すなわち外部への境界に対する関心が、公衆の注視の下で、内的な型、すなわち祭儀の正統的性質への関心に変化してゆくと述べた。彼の主張は、現在の問題を真面目に考慮するのには有用であるが、「排他性から正統性への転換」という図式は、黒川能のように、自らを常に中央社会と関連させつつ、同時にその対極にあるものとして見てきた文化的プロダクションにあてはめるのは難しい。

黒川では、排他性はいまだに擁護されている。たとえば、聖別された時と空間の観念、またその時空に関わる程度の深浅などがそれである。しかしながら、祭りの時空をめぐる四次元空間は、ユークリッド幾何学風に厳格に解釈されるべき

ではない（たとえば、参加の程度を同心円で理解するといったように）。実際のところ、黒川能では内部者と外部者が衝突と共謀を複雑に繰り返し、それによって上演が首尾良く行われるのである。外部者はここでは文字通り内部にいる。すなわち、当屋の舞台で大部分の席を占め、正面の最も良い席につくのは、くじで選ばれた訪問者であり、能座のメンバーの多くは寒夜の中、窓の外から演技を見るのである。私個人の黒川に関する最も鮮明な記憶は、その夜の終幕の光景、朝の五時ごろ、今や空虚になった舞台の中央に、使われた衣装のすべてが集められ、高く積み重ねられていた有様である。役者と能座の男たちが二日目の上演のため観客とともに春日神社へ向かう時、「内助」役の女たちは家に残り、高価で壊れやすい沢山の衣装をクリーニングし、たたむといった仕事を始めるのである。

王祇祭の「正統性」を創り出すには、外部の研究者もまた一役買っている。記録写真、舞の図、楽器の録音、祭りのフローチャート、衣装や面のカタログ、村の記録の編集などである。これらは、原始的で反省を欠いた上演技術に明確な形を与えたというものではない。儀礼のプロトコルのノートや演技のマニュアルはすでに何世紀にもわたって受け継がれ、個人的にも使用されてきた。外部の研究者は祭りの型や審美的な基準を公開かつ標準化し、それが演技を教えたり、上演を評価するのに役立ったのである。二〇世紀に行われた数世代にわたる批評行為、王祇祭や黒川能や能一般に関するそれは、外部の研究者と同じく黒川の人々の間にも環流し、その後の解釈に影響を与え続けているのである。

黒川の人々は、このオーディオ・ヴィデオや活字による記録を、彼等の祭りと能を世間に広めると同時に、際限のない質問から逃れるために用いてきた。黒川を訪れる好奇心旺盛な研究者は、しばしば、質問の答えをもらう代わりに既存の書物や論文を参照するよう求められる。黒川の人々と対話を始めるには、学者やジャーナリストの書いた先行研究には何があるかとか、それについてあなたはどう思っているかと質問するなど、なかなかの工夫を必要とするのである。

しかしながら、関心の深い地方の人々とお気に入りの専門家が共謀して、正統性の型と基準を決定したとみなすのは単純すぎる。おそらく、黒川能を広めるのに最も影響力のあった人物は、詩人で民衆主義の作家であった真壁仁（じん）であろう。彼は、一九四〇年代から一九八四年のその死まで、しばしば黒川を訪れた。一九四〇年代の後半、彼は黒川の人々が祭りへの情熱を取り戻す手助けをし、一九五〇年代にはその最初の本や記事に少数のジャーナリストや観光旅行者が、反応するようになった。一九六〇年代の半ば、全国的に知られた雑誌と協力するように黒川の人々を説得したのも、能座の人々

に東京での公演やＮＨＫとの交渉を勧めたのも彼である。しかしながら、彼はまた国家の農業政策の絶えざる批判者でもあった。一九六〇年代、彼は広く読まれた黒川に関する著書の中で、伝統的な生活様式を捨てて現代化を計ろうとする地方開発計画を厳しく批判した――黒川の人々がこの同じ計画を村に導入しようとやっきになっていたのにもかかわらず。

実際、たいていの専門家はアンビヴァレントな扱いを受ける。祭りの中心にあるイメージは、神事としての能であり、プロの演劇ではない。調査に訪れる専門家は、地元の人々の間にいつも不快な思いを作り出してきた。しばしば聞かれるのは、「我々はプロではない」といった拒絶の言葉である。かなりの数の住民が、演技をじっくり見に来る者より、祭りに飲みに来る者を歓迎しているのである。この事実は、祭式能の正統性に関する一般的なアンビヴァレンスを反映している。それは一方で、複雑に構造化された芸の型について厳格に訓練し、慎重な準備を行うことを必要としているが、他方では、情緒的で批判を超えた祝いのムードを必要としており、自意識的な分析はそれを容易に壊すのである。黒川能は何であり、いかにあるべきか。その解釈に応じて住民は分断され、外部者に接近する動きと、詮索好きな世間に対して自らを隔離し、団結しようとする動きとの両方を生み出しているのである。

六　電子的複製時代の文化プロダクション

黒川に関するＮＨＫの特別番組のヴィデオが最近手に入った。『八〇歳の指導的役割――黒川能を五〇〇年間支え続けてきた人々』というタイトルである。その番組が描いていた老人は、太夫のような能座の重要人物ではなかった。彼は上座にいる八〇歳の老人で、一九八七年から一九八八年にかけて当屋を務めていた人物であった。この選択がＮＨＫと黒川保存協会の交渉で決められたと聞いた時、私はこのテーマの選択の裏には二つの問題が潜んでいると考えた。第一点は上座の太夫が直面した困難さに関連している。彼は息子に地位を継ぐよう説得するのに失敗したため、一九八八年に別の家系にその地位を譲り、その年の王祇は彼の最後の舞台となってしまったのである。当屋に焦点をあてることは、それゆえ、明らかに家系の継続性を強調し、共同体としてのパブリック・イメージを作るのに役立ったのである。

この番組はまた、当屋のシステムを現代的状況に置き換えるにも役立った。国家予算への受給要求を制限するため、日

本政府は市民に「高齢化」時代の準備をさせようとやっきになっている。そのイデオロギー的装置の一部は「人生八〇年システム」という新たな題目であり、それをめぐって、生涯教育、定年の延長、家族の絆のレトリック、そして老年の「熟年」への再定義などが、次々と行われている（従来は逆に、老年は子供への逆戻りと考えられていたのであるが）。

黒川の人々は、この国家が語る八〇年システムを喜んではいるが、同時に懐疑的でもある。彼等は自らの正しさが証明されたと感じるが、同時に脅かされているとも思っている。ドキュメンタリーが視聴者に伝えたように、黒川は五〇〇年もの間、それ自身の八〇年システムを保持してきた。当屋システムは、名誉の年功序列的配分と老人（男性）の公的役割の承認として、地方社会で息づいてきたのである。それは明らかに誇張されたイメージであるが、全くの嘘ではない。それはさらに、国家の側の市民を国民的な生活様式に参加させようとする努力の浸透性、地方の側におけるその動員と参加条件を有利に導こうとする継続的な努力、そしてその両方に内在する限界を示している。

要するに、黒川の祭りの組織とプロダクションには、基本的な逆向きの流れがいくつか存在する。協力と競争、精神的なものと世俗的なもの（能を見に来るのか？　呑みに来るのか？）、芸術的権威のヒエラルヒーと祭りの興行における平等性、自発性と規範化、等々である。そこでは、すべての行為が、包摂と排除をめぐる線引きと条件設定をめざして、絶え間なく続けられている。

日本における伝統主義の政治は、国家の政策やマス・メディアの造り出す流行、地方のアイデンティティの探求をめぐって展開しているが、黒川能のように著名な祭りは、その三つのレヴェルをすべて具現している。能の上演と祭りの一切を通じて、王祇祭は才能の基準、社会的関係、ジェンダー間の正しい姿、そして仕事とレジャーの区分に関する不断の論争の舞台となっているのである。このメタフォリカルな論争は、第一に地方社会における諸原理の間、すなわち能座の太夫の家が持つハイアラーキカルな権威と、座のメンバーの家が要求する平等主義との間で闘われている。別の面では、国家レヴェルの表象が問題となっており、民俗芸能の民衆主義的な解釈と政府による解釈とが競争している。最後にそれは、地方と都会の間の論争でもある。農業が、ここ黒川でも他の農村部でも、決定的に消滅しかかっているまさにその時、地方の側は祭りの当事者の範囲と参加の程度を何を以て規定すべきかを問題とし、外部の国民は田舎の祭りが持っているはずの農業との本質的連関を賞賛し続けているのである。黒川は、この意味において、自分自身の歴史を持っていること

（それは地方側の関心の出発点である）と、国民の過去であること（大都会の人々はそこに惹き付けられる）との間で、微妙なバランスをとっているのである。

この論文は筆者の次の論文の改訂日本語版である。

Japanese No-Noh: Crosstalk of Public Culture in a Rural Festivity, "Public Culture," 2(2): pp. 65-81, 1990.

本章の翻訳と編集に際しては、川原ゆかり博士、三谷博先生にご協力、ご援助をいただきました。記して感謝いたします。

参考資料

金春国雄『能への誘い』淡交社、一九八〇年。
『黒川能　国立能楽堂特別講演』（カタログ）国立劇場、一九八五年一一月。
ＮＨＫヴィデオ『八〇歳男の大役　黒川能五〇〇年を支える人々』ＮＨＫ東北放送局、一九八八年。
ウィリアム・ケリー「日本の地方―中央依存の繁栄」（山崎正和・高坂正堯監修『日米の昭和』ＴＢＳブリタニカ、一九九〇年〈Kelly, 1990 の日本語版〉）。
Appadurai, Arjun, 1986, "On Culinary Authenticity," *Anthropology Today* 2(4):25.
Dominguez, Virginia R., 1986, "The Marketing of Heritage," *American Ethnologist* 13(3):546-555.
Hobsbawm, Eric and Terence Ranger(eds.), 1983, *The Invention of Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press.（邦訳、Ｅ・ホブズボウム、Ｔ・レンジャー編『創られた伝統』紀伊国屋書店、一九九二年）。
Johnson, Richard, Gregor McLennan, Bill Schwarz, and David Sutton (eds.), 1982, *Making Histories: Studies in History-Writing and Politics*, London: Hutchison.
Kelly, William W., 1986, "Rationalization and Nostalgia: Cultural Dynamics of New Middle Class Japan," *American Ethnologist* 13(4):603-618.
Kelly, William W.,1987, "Rethinking Rural Festivals in Contemporary Japan," *Japan Foundation Newsletter* 15(2):12-15.
Kelly, William W.,1990, "Regional Japan: The Price of Prosperi and the Benefits of Dependency," *Daedalus* 119(3, summer):209-227.
Kelly, William W.,1993, "Finding a Place in Metropolitan Japan: Ideologies, Institutions, and Everyday Life," In Andrew Gordon (ed.), *Postwar Japan as History*, pp.189-216., Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
Laslett, Peter, 1965, *The World We Have Lost*, New York: Charles Scribner's Sons.（邦訳、ラスレット『われら失いし世界』三嶺書房、

ㄧㄢㄑㄊㄓ)。
McKean, Philip Frick, 1989, "Towards a Theoretical Analysis of Tourism: Economic Dualism and Cultural Innovation in Bali," In Valene L. Smith (ed.), *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism* (second edition), pp.119-138., Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
Scott, James C., 1985, *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*, New Haven: Yale University Press.
Whisnant, David E., 1983, *All That is Native & Fine: The Politics of Culture in an American Region*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.
Zunz, Oliver (ed.), 1985, *Reliving the Past*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.